

ハイデガー・フォーラム第17回大会  
(東京大学・本郷キャンパス：2022年9月18日)

発表資料：嘉指信雄「多元的現実論の射程（ロシアのジェイムズ、中国のデューイ）  
——核兵器テクノロジーと統治の変容」

アウトライン

- (I) ジェイムズにおける現象学的多元主義の生成
1. 方法としての伝記／思想の「合成的な見方」と「成長的な見方」(鶴見俊輔)
    - ・生い立ち——コスモポリタン教育、絵画、医学
    - ・「存在と無」の問いと精神的危機
    - ・治療としてのプラグマティズム
  2. 多様な受容と展開
    - ・ウィトゲンシュタインと『宗教的経験の諸相』
    - ・「縁量」概念をめぐる——漱石とウィトゲンシュタイン
    - ・ロシアとジェイムズ——トルストイ／シエストフ
- (II) 「政治的統一」をめぐる問い——ジェイムズとシュミットのあいだで
1. 多元主義——シュミットによるジェイムズ批判
  2. ラディカル・デモクラシー——「シュミットともに、シュミットに抗しつつ」
  3. 核兵器テクノロジーによる統治と戦争の変容

(I) ジェイムズにおける現象学的多元主義の生成

「事物を實際上連続させる途は・・・数えきれぬほどある。・・・諸君の宇宙の統一性はそれらの基本的な誘導線によって組み立てられている。」(『プラグマティズム』第四講「一と多」, 102-3頁 [1907])

「私たちの宇宙は、現れているままの姿を見ると、広大な混沌である。単一な型の連結が、それを構成しているあらゆる経験を貫いているなどということは決してない。・・・根本的経験論は、・・・統一および断絶の両者に対して公平である」。(『根本的経験論』49頁 [1912])

ジェイムズによれば、知覚野の流動の中から特定の関係が主題化され、概念化されるにつれ、種々様々なる「意味の限定領域 (finite province of meaning)」が相対的に自立した存在を獲得するようになり、その結果、「常識的な”物”の世界、実行されるべき物質的仕事の世界、純粹形式の数学的世界、倫理的命題の世界、論理や音楽の世界、等々」の「ディスコースの宇宙」が成立する。こうした「現実の多元的領域」は、確立された縁量＝地平秩序である多様な関係の枠組みによって構成されており、「断絶」に満ちた経験野の混沌の真っ直中、「接続的關係」の諸地平を築いていくとともに、結果として、直接的には何らの関係も有しない要素同士の間にも、間接的に媒介された「連鎖状の統合」(＝concatenated union)を生み出していく。こうした意味においてジェイムズは、自らの「純粹経験の哲学」は存在論的多元主義を帰結するものと見なすとともに、「多元的な意味領域」の形成を通ずる「断絶」から「接続」への漸次的移行に社会哲学的意義を読み込んでいく。こうした見方は、オーストリアから亡命した現象学者アルフレッド・シュッツなどによって「多元的現実論」として発展させられることとなる。(嘉指「ジェイムズから漱石と西田へ——「縁量」の現象学、二つのメタモルフォーゼ」, 『哲学』No. 48, 1997)

## 1. 方法としての伝記／思想の「合成的な見方」と「成長的な見方」（鶴見俊輔）

[cf. 上原隆『「普通の人」の哲学—鶴見俊輔・態度の思想からの冒険』1990]

[S. Tsurumi, *Pragmatism of William James, April 1942*]

[Perry, Ralph Barton. \*The Thought and Character of William James\*, 2 vols, 1935.](#)

Jean Wahl, *Vers le concret: Études d' Histoire de la philosophie contemporaine*, 1932.

(水野浩二訳『具体的なものへ——二十世紀哲学史試論』2010)

Howard Feinstein, *Becoming William James*, 2000;

Jacques Barzun, *A Stroll with William James*, 2002, etc.

### 1-1. ジェイムズの生い立ち——

「[父ヘンリー](#)は、激しい絶望、そして自己放棄とより高き力への服従を通じて獲得される同じように激しい楽観への移行を本質とする宗教的経験を鮮やかに具現した存在であった」。(Perry, vol. I, 165)

#### [妹アリス \(1848-1892\)](#) 宛ての手紙 (1891 : ジェイムズ 49 才)

「おまえと会話する機会がなくなってしまうたら、どんなにハリーは寂しく思うだろう！僕たちの間だけの話だけれど、僕とハリー [小説家となる弟ヘンリー] の二人は、おまえが会話の中で語ったことが世界の遺産の一部となるよう、その幾らかでも哲学とドラマの中へと生かすように試みることをおまえに約束する」。

#### [弟ヘンリー](#)への手紙 (1872年10月 : ジェイムズ 30 才)

「[抽象的研究の後、ひたすら自然の景色に没入することは、ずっと逆立ちをしていた後で自分の両の足で立つようなものだ](#)。もし可能だったらのことだけど、僕は来年の夏、水彩画を描き始めるように努めてみたい。僕は最近、哲学的営為というものにうんざりして懐疑的になっていて、そのため、自分が絵をあくまでも描き続けなかったことをとても後悔したり、お前のように、その人間にとっては物事の美的関係が真の世界であるような者を羨ましく思っている程だ。確かに美的関係はどんな機械的・論理的抽象観念よりも、普遍的な生の、より深き部分を明らかにできる」。(Perry, vol. I, 330)

父ヘンリーと、愛情と寛容に満ちた女性であった母親メアリーとを中心としたジェイムズ家には、この他にさらに三人の子供がいた。[ウィリアムから数えて三歳年下のウィルキンソンと四歳年下のロバートソン、そして六歳年下の妹アリス](#)である。[誰からも愛されていた元気者のウィルキンソンと、ジェイムズ自身によって自分と弟のヘンリーを足したより以上の才能があると言われたロバートソンは、ともに南北戦争に黒人兵部隊の将校として従軍している](#)。そして、その経験を通して黒人の未来に強い関心を抱くようになった二人は、共同で黒人のためのプランテーションをフロリダに開く。不況と根強い偏見のために、二人は、数年を待たずしてこの理想主義的試みを諦めなければならなかったが、年上のウィリアムとヘンリーは、自分たちとは異なり、現実の社会に積極的かつ具体的に関わってこうとした二人の姿を賞賛と気遣いの混じりあった眼でみていたようである(拙稿「若きジェイムズにおける現象学的領野の開示 (1) ——『存在論的驚異症』と『生への還帰』」；「—— (2) “職業としての哲学” と“存在すること”」(『愛知』No. 20 & 21, 2008;2009) より [以下、「現象学的領野の開示 (1) (2)」と略記])。

## コスモポリタン教育、絵画、医学（自然科学）

### ヨーロッパでの教育

父ヘンリーは、いまだ学問的には遅れたアメリカでは得られぬ幅広く豊かな教育を子供たちに与えるため、しばしばヨーロッパへと家族を引き連れて出向いている。小説家となった弟のヘンリー・ジェイムズとともにウィリアム・ジェイムズが受けた英才教育は、彼の思想にコスモポリタンの性格を与えたとともに、後に彼が思想的にヨーロッパから自立することを可能ならしめたと言える。ジェイムズは、[生まれて間もない1843年を皮切りに、19歳でハーヴァード大学理学部に入学するまでに、3回、](#)

都合6～7年、つまり、青年になるまでの大体3分の1の歳月にわたり、イギリス・フランス・スイス等で学校に通ったり家庭教師についたりして教育を受けることとなる。この間、ジェームズはフランス語とドイツ語を自分のものとし、ラテン語、ギリシア語、イタリア語も学習している。父ヘンリーは常に「何ものかになるよりも、まず、人間であれ」ということをお口にしていたといい、この父を中心にしてなされた家庭生活、ヨーロッパ旅行、そして教育の3つは、ジェームズの人格を形作った欠くことのできない要素である（同上）。

### 絵画——感覚と現象の発見

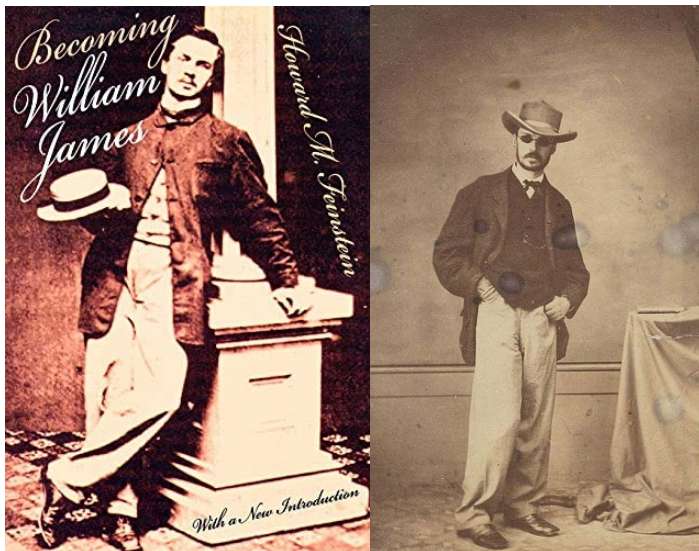
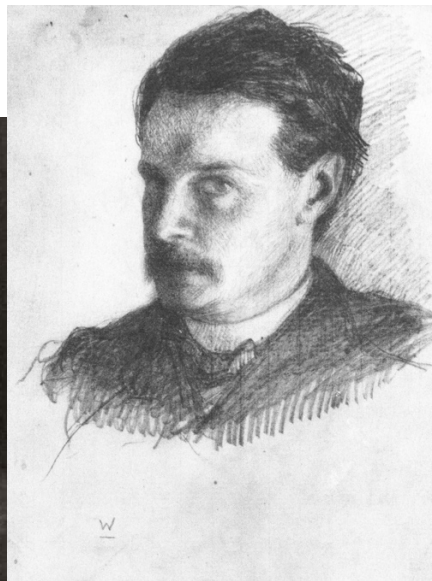
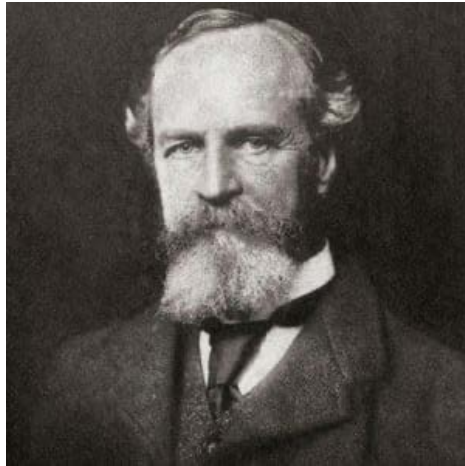
ジェームズは、パリ在学中に足しげく通ったルーヴル博物館の名画に刺激され、特にドラクロアに興味を覚え、その模写を試みたりもしている。さらに、アメリカに帰国していた 18歳の頃、プロの画家に成るべく、当時名の聞こえた画家であったハントについて一年ばかりの間学んでいる。ちなみに、ジェームズの家には祖父の代から数えて7人の画家がいる。・・・

しかしながら、自分の画才に見切りをつけたジェームズは、彼を科学者にしたいという父の切なる願いもあり、1861年、19歳の時、ハーヴァード大学理学部に入学し、化学を専攻することとなる。二年目の一学期を終えた時、背中の痛み、頭痛、目の痛み、そして精神の不安定等、彼を一生苦しめることとなる病いが頭をもたげ始め、彼は一学期間休学している。この静養期間中、文学、科学、哲学関係の本を読み漁り、人間探求の道への意欲を強くした彼は、再び大学に戻ると、生来の実験嫌いもあり、化学科から比較解剖学・生物学科に籍を移す。卒業後、一生の仕事を決めるにあたって、ジェームズは、・・・医者になることを決心し、22歳にして改めて医学部に入り直す。

まもなく、生物学科のルイス・アガッシ教授を団長とするアマゾン河流域の生物学的探検隊が組織されると、アガッシの人柄に傾倒していたジェームズは、勇躍これに参加し、丸一年ブラジルに滞在する。資料の蒐集、記述分類といった調査隊の仕事にジェームズは興味を見出すことができなかったが、そうした彼を励まし支えたのは、「友よ、すべての理論は灰色なり。黄金なすいのちの枝はただ緑」というゲーテのファウスト中の句を好んで用いたというアガッシの人的魅力と、小グループが協力する時のみ得られるところの緊密な人間関係であった。後年、ジェームズは、このカリスマ的な魅力を湛えていたという博物館学者アガッシを回顧するエッセイの中で次のように述べている。

我々は全て、抽象主義者であることから逃れられない。例えば、そういう私自身、いままでにそれから逃れることができた例しがない。しかし私は、アガッシとともに過ごした日々によって、およそあらゆる種類の抽象主義者と、世界の具体的豊穡の光の中に生きる者たち全てとの間に存在する違いというものがあるのかを徹底的に教えられたので、それ以来、私は決してその違いを忘れることができないのである。(Memories & Studies, 6)

・・・しかし帰国後ジェームズは、再び昂じ始めていた眼疾をはじめ、神経病や消化器官の病いのため休学せざるをえなくなる。療養のため、今度はドイツに旅立つことになるのだが、ジェームズの胸には療養の他にもう一つの狙いがあった。それは、学問的にも先進国であるドイツで、この際、学問の基礎を徹底的に身につけようということである。療養と研究の相半ばするこの18ヶ月間のドイツ留学中、彼はベルリン大学に通い、生理学の全ての講座に出席しているが、一方、実験中心の学問に自分は向いていないし、眼を長時間にわたって使用することができないから事実上不可能であるという自覚をさらに強め、文学、哲学、心理学などに涉った知的遍歴にひとり身を任せている。このドイツ滞在中に読んだ本は、ルナン、ホメロス、シェイクスピア、ダーウィン、ラース、カント、アガッシ、ジャネ、レッシング、シラー、ゲーテ等、広範囲にわたる。また当時ドイツでは、実験生理学や心理学が新しい展開を遂げつつあったことは、後年ジェームズが『心理学原理』を執筆する直接的契機となる。ジェームズが『心理学原理』の執筆を開始する1878年は、ヴントがライプチヒに世界初の心理学実験室を設置するちょうど前年にあたるのである」（「現象学的領野の開示-(1)」）。



- 1) ウィリアム・ジェイムズ (1842-1910)
- 2) ジェイムズの自画像 (1866年頃) [Houghton\_MS\_Am\_1092]
- 3) *Becoming William James*, by Howard Feinstein, 2000. [表紙]  
Cf. Kaag, John. *Sick Souls, Healthy Minds: How William James Can Save Your Life*, 2020.
- 4) ブラジル滞在中、天然痘に罹って回復した頃 (1865) [Houghton\_MS\_Am\_1092]



## 『生理学的心理学』（1876-77）のための講義ノート

「諸々の物が知識の内容なのであり、感覚は見落とされてしまう。このことは実に真理であり、描くことを学ぶ者は誰でも、自分の感覚というものが実際何たるかを、長い苦しみを経て初めて発見することができるようになる。感覚とは何であるかに注意したり気を使ったりすることに全く慣れていないからだ。感覚が示す物にははるかに多く心に向けてきているのだが」。(Perry, I, 477)

### 「存在と無」の問いと精神的危機

オリヴァー・W・ホームズ（後の最高裁判事・哲人法官）宛て書簡（ベルリン、1868：W. J. 26 才）

「親愛なるウェンドル

今夜、自分がこんなに悲しいということが一体何を意味するのか、僕には分からない。(Ich weiss nicht was soll es bedeuten dass ich so traurig bin, tonight)・・・僕は、アメリカから携えてきた幾つかの乾き切った古臭い観念をずっと繰り返し反芻してきたけれど、ついにそれらも消えて無くなってしまい、裸形なる宇宙は、今までに僕が経験したことのある如何なるものをも越えたものとなってしまった。・・・

・・・僕が国に帰ったら、定期的集まって最も高遠な問題だけを議論するための哲学的な会を作ろうじゃないか・・・真面目な話、十分に年月が経てば、成長してとても重要なものになるかもしれない。・・・

・・・僕が最も陰鬱にふさぎ込んでいる時、君にだけ手紙を書くということを、君への敬意の表れと取ってくれるかどうか僕には分からない。——多分、そう取ってくれるべきだ—君は、世界の残りの全てが波の下に沈んでしまった時、僕がしがみつく唯一の高峰なのだから・・・」(Perry, I, 507-508)

『宗教的経験の諸相』中のフランス人憂鬱病患者の手記が描き出すところの精神的危機は、丁度この頃に起こったものであると推定されている——

「こうして、哲学的な厭世主義の状態におちいり、将来の見通しについてすっかり気持ちが陰鬱になっていた頃のある夕方のこと、私はある品物を取るために、薄暗がりの衣裳部屋へはいっていった。その時突然、何の予告もなしに、まるでその暗闇から現われたかのように、私自身の存在に対する身の毛もよだつような恐怖心が私を襲った。それと同時に、かつて保養所でみたことのある癲癇病患者の姿が、私の心に浮かんできた。・・・もしかすると、あの姿が私なのだ、と私は感じた。・・・それ以来、宇宙は私には全く一変してしまった。毎朝毎朝、私は、みぞおちにぞっとするような恐ろしさを感じながら、そして、私がある前にも知らなかったしその後でも感じたことがなかったような、生についての不安感を覚えながら、眼を覚ました。それは啓示のようであった。そして、そういうじかの感情は消え去ったけれども、その経験によって、それ以来、私は他人の病的な感情に共感できるようになった。その経験は次第に色褪せていったが、数ヶ月というもの、私は一人で暗闇の中へ出かけることができなかった。・・・人生の表面の下に隠されているあの不安の奈落に気づかずに、どうして他の人々が生きていられるのか、どうして私自身がこれまで生きてきたのか、と不思議に思ったことを、私は覚えている。ことに私の母が、たいへん陽気な人で、危険を意識しないのは、私には全くの謎のように思われた。しかし、私自身の精神状態の秘密をもらして母の気持ちを乱さないようにと、私がたいへん用心したことは貴方にも十分信じていただけるだろう。私のこの憂鬱症の経験には宗教的な意味がある、と私はいつも思っている。・・・これ以上実例を示す必要はない。私たちが考察した例で十分である。その実例の一つは、死滅する事物の空しさを、もう一つは、罪の感じを語っている、そして残る一つは宇宙の恐怖を述べている。——そして、それら三つの道のどれをとっても、人間の生まれながらの楽観主義と自己満足とが塵にも等しいものになってしまうのである」(『著作集 3』238-240)。

### 『哲学の諸問題』

「突拍子もないことを言うようだが、暗室に一人で閉じこもって、自分がそこに存在するという事実、真っ暗闇の中にうづくまる自分の奇妙な体の格好・・・、自分の異様な特徴、等について考え始めてみ

よ。そうすれば、いつしか存在の普遍的事実ばかりでなく、その細部にまでも驚異の念が忍び寄るであろうし、また、そうした驚異の念を鈍らせるのはただ馴れただけだ、ということを知ることができるだろう。何ものか (anything) が存在するということだけでなく、まさにこのものが存在するということは神秘的である!」(『著作集 7』 33-34 頁)

「絶対存在は絶対の神秘である。絶対存在は自足している (*selbstständig*) もの、自明 (*selbstverständlich*) ではない。それと無との関係が我々の知性へと媒介されていないからである」(*Collected Essays and Reviews*, 127)。

#### 「合理性の感情」

「存在の基底は、我々がもっぱらそれに偶然ぶつかって見出すものであり、また (我々が行為しようとするならば) それについてできる限りためらい、訝ってはならぬものであっても、論理的には依然我々に不透明なままである」。(『著作集 2』 99 頁)

「我々の終局の目的のうちに、また我々の最深のエネルギーである愛や熱望の対象のうちに恒常的なものは何もないことを考えると、我々は言い知れぬ不気味さ (*Unheimlichkeit*) に襲われる。認識の理想として要請される宇宙と、宇宙を認識する者という途方もなく不釣り合いな方程式は、これに劣らず不釣り合いな、宇宙と行動する者という方程式にまったく匹敵する」。(『著作集 2』 112 頁)

#### 「人間における或る盲目性について」

「生命が存在するのと同時に、一步離れたところには、死が存在する。いつでも存在していた美しさと同じ、そのただ一種類の美しさが存在しているのである……しかしながら……すべてを『恐るべき内面的空虚』の感じをもって眺める人にとっては、この同じ事実こそ、すべてが退屈きわまるものだという感じを起こさせる所以の主たるものである……」

ホイットマンのように、この世界の現前を眼にしているだけで、満ち足りた思いで心を惹きつけられるということは、この世界の測り難い意義と重要性とを感受する力を示す一つの特徴、しかも最も根本的な特徴である。しかしながら、もしも我々が初めからそれだけの感受性をもっていない場合、どうしたらある経験に含まれる決定的な意義を感受しえるようになるだろうか？ こうすればそうなりますという、出来合いの方法はないのだ。その性質上、秘密であり神秘であるから、こうした感覚は、しばしば神秘的な、思いもかけざる仕方で訪れて来る。時としては、我々の幸福が埋葬されている墓場だと思っていたようなところから、そうした感覚が見事に開花してくることもあるのだ。」

(『著作集 1 / 心理学について』 252-253 頁 &

スティーヴン・C・ロウ著『ウィリアム・ジェイムズ入門』1996、76-77 頁)

「いずこかで存在は、じかに非有に立ち向かい——黒き虚空へと切り込む。

月の光漲る球体が蒼みがかった暗淵の中を切り開き進むように」

(ジェイムズ遺稿ノート / (Perry, II, 384)

(cf. 嘉指「根本的経験論、もしくは方法的エポケーなき現象学——ジェイムズにおける“存在と無”の問い」、『現象学年報』第 11 号、1996)

#### 調停 (治療) としてのプラグマティズム——「弱さに襲われた強き人」

ようやくジェイムズが、自己の危機を乗り越える方向をルソー・ヴィエの主意主義的哲学の中に見出してから丁度一年程が経った頃、ジェイムズは生理学の講義を非常勤講師として一年間担当した後、その専任になるよう学長のエリオットに勧められるのである。受諾すれば哲学を担当する可能性を全く失うことになるのではないかと危惧し、逡巡するが、結局、生理学専任の職を引き受けるように決心した気持ちを日記に綴っている——

「……普遍的な問題に直接的に挑む必要も、抽象的な形で挑む必要もない。我々は、あらゆる仕方その解決を目指す——生きることによって、そして、すべての物ごとに含まれている小さな様々な具

体的問題を解決することによって。自然の方法とは忍耐であり、そして、ゲーテが哲学と自然についての意見の中で示している、かの悠々と構えたる信念、ピンと張りつめてはいないけれど、微笑みつつ、その中にいくらかの懐疑（しかし、それは、解決を先に延ばすことに絶望してはいないものだが）を抱いているかの信念は、決して卑しい態度ではなく、おそらくは、激しく性急な悲劇的挑み方よりは、生をより豊かに受け止め、より広い展望を得ることができる一つの様式に属するものなのだ。自然の諸目的は、すべて、手段を通して構成される——おそらく、そうした自然の諸目的を回復する最も健全な道は、あらゆる手段を通じてそれらを辿り、確認することだ」。(Perry, I, 343)

## 1. 多様な受容と展開

### ウィトゲンシュタインと『宗教的経験の諸相』

R・グッドマン『ウィトゲンシュタインとウィリアム・ジェイムズ』（岩波書店、2017）

#### 「第二章 1 病める魂

・・・ケンブリッジに戻った最初の年、ウィトゲンシュタインはある若い哲学徒に出会った。生涯の友となるモーリス・オコナー・ドゥルーリーである。ドゥルーリーはまじめで飾るところのない人柄で、ウィトゲンシュタインが受け入れ、追い求め、胸襟を開いた人間の一人だった・・・。

ドゥルーリーの部屋で紅茶を飲みながら、・・・ウィトゲンシュタインは言った——

W：・・・君が読むべき本は、ウィリアム・ジェイムズの『宗教的経験の諸相』だよ。僕はかつて、あの本にとっても助けられたんだ。

D：おお、そうですか。僕も読んだことがあります。ウィリアム・ジェイムズのものなら何でも、読んで楽しいですね。ジェイムズは、そういう人間的な人なのです。

W：彼を良い哲学者にしているのはそれなんだ。彼は、本物の人間だった。

・・・〈ジェイムズは本物の人間だから良い哲学者だった〉というウィトゲンシュタインの評は、ジェイムズの声についてなされた評だとも考えられよう。というのも、ジェイムズの存在は、叙述の舞台のうえの登場人物としてのみならず、彼の言葉全体に行き渡る響きあるいは現前として、著作から強く感じ取れるからだ・・・」（66-76頁）。

### ・「縁暈」概念をめぐる——漱石とウィトゲンシュタイン

フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（1936）

「わたしの知るかぎり、“*fringes*”（縁暈）という名のもとに地平現象に注意したのは、ウィリアム・ジェイムズだけである。彼は志向の対象性や含蓄についての現象学的に獲得された理解もなしに、どうしてこれを問題にしえたのであろうか」。

#### ジェイムズ『心理学原理』

「心理学者が全く看過してしまっているのは、意識中のこの自由な水である。心中の全ての明確なる心像は、その周囲を流れる自由な水に潤せられている。これがあってこそ、その心像の遠近種々なる関係の感じ、過ぎ来し方の余韻（the dying echo of whence it came to us）、行方の曙光（the dawning sense of whither it is to lead）がある。心像の意味・価値は全て、これを繞り、これに随うこの暈（halo）、あるいは半影の中にある。——否、中にあるというよりもむしろ、これと融合して一になり、その骨の骨、肉の肉となっている。これがために、実際心像としては過去と同一事物の心像であるとしても、更めて受け新たに解せられたるその事物の心像となる。」（『心理学』上, 231）

このあとに次の文が続く——「心像の意味・価値はすべて、これを取り囲みこれに従う、この暈（halo）あるいは半影（penumbra）のなかにある、——否、なかにあるというよりもむしろこれと融合してひとつになり、その骨の骨、肉の肉となっている」。ここで「暈」「半影」と呼ばれているのは、より一般的には、ジェイムズが「縁暈（fringe）」と名づけたものであり、現象学における「地平（horizon）」にあたる。実際、

ジェイムズは、ある文脈では、“horizon”とも言い換えており、パース、フッサール、シュッツ、西田、漱石、後期ウィトゲンシュタインなど、さまざまな哲学者が注目・考察し、展開した概念である。

#### ・漱石の場合——

「凡そ文学的内容の形式は (F +f) なることを要す。Fは焦点的印象または観念を意味し、fはこれに附着する情緒を意味す」。(『文学論 上』岩波文庫, 31頁)

「文芸家は今申す通り自己の修養し得た理想を言語とか色彩とかの方便で表すので、その現される理想は、ある種の意識がある種の連続をなすのを、そのままに写し出したものに過ぎません。だからこれに対して享樂の境に達するという意味は、文芸家のあらわした意識の連続に随伴するという事になります。だから我々の意識の連続が、文芸家の意識の連続とある度まで一致しなければ、享樂という事は行われるはずがありません。いわゆる還元的感化とはこの一致の極度において始めて起こる現象であります」。(「文芸の哲学的基礎」(1907)、『漱石文芸論集』岩波文庫, 1986)

#### ・ウィトゲンシュタインの場合——

「意味の感じ (sense) は、思考のまったく特異な要素である。それは、内観によって振り返り、引き離し取り上げて吟味することのできない、束の間の「推移的」心的事実のひとつであり、昆虫学者がピンで留めた昆虫を眺め回すようにはいかないのである。かつて私が用いた(ややごちない)用語で言えば、それは主観的状態の「縁量 (fringe)」に属するものであり、「傾向の感じ」である……。(心理学 下, 19-20)

こういう言述に直面して、ウィトゲンシュタインは、私たちが日常言語へと立ち戻らせようとするわけである。「君が……という言葉が発したとき、君の内に何が起きていたのか、言ってくれないか？」——これに対する答えは、「私は……を意味していた」ではない(PI, 675)。意味は経験の一種ではないと、ウィトゲンシュタインは力説する。

……だれかが意味することを聞いて、その意味が初めて分かったときに、私たちが経験するのは、「我々の心の、まったく特有な触発・性向 (affection)」であり、ジェイムズは「我々の心的生活の優に三分の一は、いまだ不明確な思考の構想への素早く前駆的な遠近法的展望から成っている」と推定する(心理学 上, 229-30)。ここは、ジェイムズが、さらにもう一步、目立たぬ一步を踏み出している箇所である——ここでは、意味の把握とは「心の特有な触発・性向」にちがいないという考えに踏み込んでいる。とはいえ、ジェイムズの問いかけ——だれかが意味していることを突然把握するとはどういうことか——は、その後期哲学の全期間のあいだ、ウィトゲンシュタインから離れることはなかった。ジェイムズの本は、ウィトゲンシュタインにとって、哲学的問題にずっと命を吹き込み続けるものだったのだ。(グッドマン『ウィトゲンシュタインとウィリアム・ジェイムズ』224-238頁)

#### ・ロシアとジェイムズ——トルストイ&シエストフ

*William James in Russian Culture*, ed. by J. D. Grossman and R. Rischin, Lexington Books, 2003.

##### Introduction

“Arising at the turn of the century, Russian interest in James burgeoned in the early 1990s, peaked, and then was largely forced underground with the rise of Stalin. During much of the Soviet period James was unacceptable, denounced in the official press as a mere puppet of American capitalism and lampooned as the “Wal Street Pragmatist.” …

““William James is a figure who simply won’t go away,” remarked Hilary Putnam in his elegant little book *Pragmatism* (p. 5). The James revival in Russia in the post-Soviet 1990s shows this to be true



for Russians as well. *The Varieties of Religious Experience*, *The Will to Believe*, and *Pragmatism* have reappeared, and some shorter pieces have been translated for the first time. After the distorted and disfigured James of Soviet times, readers are rediscovering his “heuristic wealth of ideas” (2).

7 Randal A. Poole,

“William James in the Moscow Psychological Society: Pragmatism, Pluralism,” *Personalism*.  
 “In 1890, the same year it [*The Principles of Psychology*] was published, Nikolai Grot wrote a short review of James’s *The Principles of Psychology* for *Questions of Philosophy and Psychology*, [Grot believed James’s work could further, in its comprehensive coverage of the state of the field abroad, the “progress of our spiritualistic psychology and philosophy.”](#)”

“Apart from reviews and some further consideration by Chelpanov, James received no significant attention in the Psychological Society until after the appearance of *Pragmatism* in 1907. However, [when both \*Pragmatism\* and \*The Varieties of Religious Experience\* appeared in Russian in 1910, William James’s name became the center of intense discussion and debate](#) (132-133).

8 Brian Horowitz, Lev Shestov’s James: “A Knight of Free Creativity”

[レフ・シェストフ『(ドストエフスキーとニーチェ) 悲劇の哲学』[1903; 日本語訳, 1934]

“In 1911 the philosopher Lev Shestov, already known for his writings on Leo Tolstoy and Fyodor Dostoevsky, registered the death of his esteemed American colleague William James. “The Logic of Religious Creativity [In Memory of William James]” is one of the seminal essays in the early reception of James in Russia (Shestov, *Great Vigils*, pp. 291-314) (159).

“Turning to William James as to an ally, Shestov claims that [“if \[James\] were asked what the fundamental flaw of all philosophical and theological constructs might be, he would probably reply: their incessant striving to force all of life to submit to a single idea.](#) Thales committed philosophy’s original sin by attempting to find a universal source of being” (161)....

[“While acknowledging James’s good intentions, Shestov here switches sides complaining that James actually forged a path similar to his rationalist predecessors when he valorized usefulness and practical value in religious experience.](#) He calls this desire for utility, “the gnosiological teaching” of pragmatism and contends that the ideas in *Pragmatism* clash with those found in *The Varieties of Religious Experience* (163).... “For contemporary scholars reading Shestov’s interpretation of James, it is obvious that Shestov reduces and manipulates James’s ideas (166).

4 Andrew Wachtel, “The Moral Equivalent of War”: Violence in the Later Fiction of Leo Tolstoy”

[In his famous essay, “The Moral Equivalent of War,” William James makes the claim that no calls for the elimination of war will ever succeed unless they take into account the historical, ethical, and aesthetic reasons for its existence.... James cites Leo Tolstoy,](#) whose pacifism “makes the fear of the Lord furnish the moral spur provided elsewhere by the fear of the enemy” (*ERM*, p. 169).

James does not mention which of Tolstoy’s works in particular he has in mind when referring to Tolstoy’s militant pacifism.... (81).

... The two men seemed to be in substantial agreement, both in terms of their opinions and their positions in society. [In particular, both \[Tolstoy and James\] were avowed pacifists whose reputation in](#)

[part rested on their ability to denounce the bellicosity of their respective government.](#) And their pacifism was derived from the same source, the single Gospel passage which they took to be the key to all Christian conduct properly understood: “But I say unto you, Love your enemies” (Matthew, V: 43)...(83).

... This, for example, is [how Tolstoy greeted the announcement of the Russo-Japanese War](#) in his article “Stop and Think” (1904): “[War again. Again completely unnecessary, completely uncalled-for sufferings, again lies, again general hypnosis, and human beastliness...](#)” 83).

[James, for his part, thundered in similar fashion against such American militaristic actions as the 1898 war in the Philippines,](#) as in this letter to the editor of The Transcript: “[W]e have all been swept away by the overmastering flood. And now what it has swept us into is an adventure that in sober seriousness and definite English speech must be described as [literally piratical](#)” (ECR, p.155). (83)

## II 「政治的統一」をめぐる問い——ジェイムズとシュミットのあいだで

### ラディカル・デモクラシーとしての根本的経験論 (Radical Empiricism)

ジェイムズは、純粹経験の哲学は存在論的多元主義を帰結すると見なすとともに、「多元的な意味領域」の形成を通ずる「断絶」から「接続」への漸次的移行に社会哲学的意義を読み込んでいく——

[「倫理的にみて、人本主義の多元的形態は、私からすると、私の知るどんな哲学よりもはるかに強力に、現実を把握している——それは、本質的に一つの社会哲学であり、共同 \(co-\) の哲学なのであって、そこでは接続的關係が効力を現している」](#) (根本的経験論』165頁)。

米西戦争 (1898) 当時、ボストンの反帝国主義者協会 (the Anti-Imperialist League) の副会長の位置にあったジェイムズは、フィリピン人の内面的独自性を無視したアメリカ政府の強圧的な施策を痛烈に批判する論陣を新聞・雑誌紙上に張っている。

### 1. 多元主義——[シュミットによるジェイムズ批判](#)

カール・シュミット「政治的なものの概念」(1933年版)

(権左武志訳『政治的なものの概念』岩波文庫、2022)

[以下、強調は訳者によるもので、1932年版と異なる加筆訂正を示す]

#### 「2 [政治的なものの基準としての味方と敵の区別]

本来の政治的な区別とは味方と敵の区別である。この区別は、人間の行為と動機に政治的意味を与える。最終的に、あらゆる政治的行為と動機はこの区別に還元できる。……

[味方と敵の区別は、結合または分離の最も強力な強さを意味している](#) (119-120)。

#### 3 [敵対関係の現象形態としての戦争]

味方と敵の概念は、具体的・実存的な意味で解釈されなければならない。隠喩または象徴の話法として解釈されてはならず、経済的・道徳的・その他の観念に混入されて弱められるのではなく、ましてや私的・個人主義的な意味で私的感情や傾向の心理的表現として解釈してはならない。……

敵は、競争相手でも敵対者一般でもない。……敵とは、少なくとも場合により、すなわち現実的可能性として**実存のために闘争する人間総体**であり、同様な人間総体に対立する人間総体である。公的な敵のみが敵である。……

……[政治的統一](#)の本質は、統一の内部でこの極端な対立状態を排除する点にある。…… (122-125)

#### 4 [政治的統一の形式としての国家、多元主義による疑問視]

・・・政治的統一が存在するならば、政治的統一はつねに標準的統一であり、全体的で主権をもつ。政治的統一は「全体的」である。というのも、第一に、あらゆる事柄は潜在的に政治的であり、従って、政治的決定に左右されるからである。第二に、人間は全く実存的に政治関与に巻き込まれるからである。政治は運命である。・・・

人々は、国家内部の経済的結社がどれほど大きな政治的意味をもつかを認識し、とりわけ労働組合が成長し、その経済的権力手段であるストライキに対し旧国家が相当無力だと気づいた時、国家の死滅と終結を早まって宣言した。これは、私の知る限り、一九〇六年と一九〇七年以降初めて、フランスとイタリアのサンディカリストの自覚的教説として起こった。彼らは「多元主義的」国家論を生み出す刺激を与えた。この国家論の根本教義は、ドイツの国家学者、特にオットー・フォン・ギールケの類は[フーゴ・プロイス]が唱えた「あらゆる人間団体の本質的同一性」だった。この国家論の哲学的基礎と政治的神学は、「コスモス」と「体系」という最終的統一への欲求が迷信であり、中世スコラ学の残滓だと考えた米国哲学者ウィリアム・ジェームズのプラグマティズムだった。人々は、ここから「多元主義」の構想と政治理論を結びつけた。多元主義は、本質的に自由主義的な思考様式を持つ第二インターナショナルに最も良く適合する。首尾一貫した自由主義にとり、個人という実在のみが存在し、全体としては人類のみが存在する」(136-141)。

#### 5 [戦争と敵に関する決定]

本質的に政治的統一である国家には、交戦権、すなわち場合によって自分自身の決定で敵を定め、敵と闘う現実の可能性が必要である。・・・

標準的な政治的統一である国家は、戦争を遂行し、公然と人間の生命を自由に使用する可能性という途方もない権限を独占した。というのも、交戦権は、こうした自由な使用を含んでいるからである。

#### 7 [世界は政治的統一ではなく、政治的多元体である]

・・・国家が一般に存在するかぎり、地上にはつねに複数の国家が存在し、地上全体と人類全体を包括する世界「国家」はありえない。政治的世界は、一元的宇宙ではなく、多元的宇宙である。・・・国内の多元主義理論の意味は、国民の政治的統一を否定する点にある。

#### 「訳者解説

・・・シュミットが改訂作業と並行してナチスに入党したのは、味方と敵という区別という彼自身が創り出した概念に呪縛された結果だと言える。・・・人間性が善か悪かという単純な二分法で政治理論の人間学的前提を説明するのは分かりやすい一方で、この論法は、個人が善と悪を選択する自由を備えているという道徳神学的解決を無視している。・・・ここでシュミットは、・・・嘘と詐欺で悪人を欺く最低水準の人間性を不変の前提としている。・・・グロティウスの近代自然法は、自然状態の個人が、自己保存する自然権を持ち、戦争の開始時にも遂行時にも守るべき正義の法があると説いていた。・・・シュミットは、多元性と統一の相反する要求を統合しようとする連邦主義理論の意義を理解できていない。・・・シュミットの言う政治的なるものの概念は、敵対関係を認識し、恒常化することはできても、敵対関係を相対化し、解消するには役立たない点で、一面的概念なのである。」(270-276)

#### 『バルチザンの理論——政治的なものの概念についての中間所見』[1963]

新田邦夫訳(ちくま学芸文庫, 1995)

「・・・究極的な危険は、絶滅手段が存在するという事ではない。また人間のあらかじめ瞑想する邪悪さが存在するという事でもない。究極的な危険は道徳的な危険から逃れえないことである」。(194)

「「訳者解説」・・・他の人間に対してこのような絶滅兵器を使用する人間は、この他の人間を道徳的に劣等で絶滅しなければならない非人間あるいは犯罪者と思わなければならない。さもなければ、自分

自身が残虐な非人間あるいは犯罪者になってしまいます。このことを、シュミットは、「究極的な危険は道徳的な危険から逃れえないことである」と考える（正戦論の危険性）。(237)

薩山宏『カール・シュミット——ナチスと例外状況の政治学』（中公新書，2020）

#### 「技術の時代における政治と文化」

・・・技術の時代になると、なるほど政治が技術化される頻度は高まるだろうが、いかに政治が技術化されようと「政治的なもの」までが失われるしまうわけではない。・・・あらゆる政治勢力が技術を利用できる以上、どの政治勢力が技術を利用する力をもつか時代を決定する意味をもつ。技術の時代の次に政治の時代がやってくるのではなく、技術の時代は同時に政治の時代なのである。いくら技術の発展が高度化しても、政治そのものを抹消することはできない」（50）。

#### 「思想と学問の特徴」

・・・彼は政治の本質を敵・味方の区別にあるというが、これによっては国内政治の大部分は説明できない。その大部分は、例えば高速道路を早く造るのがいいのか、介護施設の充実を図るのか教育の無償化が先かといった問題の優先順位の問題、それをめぐる妥協や戦略から成り立っており、敵・味方の区別は政治の第一義的問題にはならない（246）。

#### 「政治がすべてという発想」

・・・シュミットは主権、国家、政治という三つの概念の同一性を主張しており、それらの公分母となるのが決断だった。・・・ある意味でこの事実は「例外状態」において露呈する。「例外状態」が日常的には隠れていた事実連関をあらわにし、そこで「政治的なもの」の全能性が明らかになる。・・・逆に言えば、シュミットは政治的秩序の崩壊を何よりも恐れる思想家であり、それを回避できるのが主権者の断固たる決断だった。このような論理構成のゆえに、かれの理論においては、何のための決断よりも決断それ自体が重視されることになり、カール・レーヴィットや丸山正雄の批判もここに向けられている。決断主義者シュミットという呼称はかれの政治思想の核心をついている（247）。

## 2. ラディカル・デモクラシー——「シュミットともに、シュミットに抗しつつ」

シャンタル・ムフ『政治的なものについて』[2005] 酒井隆史監訳・篠原雅武訳（明石書店，2008）

「民主主義政治の種差性は、われわれ／彼らの敵対を乗り越えることにあるのではなく、むしろこの敵対を設定するやりかたの多様性にこそあるのだ。民主主義が必要としているのは、われわれ／彼らの線引きを、現代の民主主義の構成原理である多元性の承認と両立可能なしかたで行うことなのだ。

『政治的なものの概念』は、もともと一九三二年の出版だが、しかしながらシュミットの批判はいついかなる時より、むしろいま妥当なものとなっている。・・・もちろんこの点で、私たちはシュミットと意見を異にする。・・・彼にとって唯一可能な多元主義は、諸国家の多元主義である。だから私がここでやろうとするのは、「シュミットともに、シュミットに抗しつつ」思考することである。・・・敵対性がつねに可能性として実在することを承認するだけでなく、さらに、われわれ／彼ら関係をべつのやり方で構成すること政治的様態を想像することもできるのである。このような方向性をとるならば、民主主義政治の課題がわれわれ／彼らをべつのやりかたで確立することによって、それが敵対性へと暴発するのを遠ざけようとするところにあるのがわかるだろう（26-32）。



### 3. 核兵器テクノロジーによる統治と戦争の変容

アメリカ憲法の制定過程で論争の中心となった「合衆国 (United States)」の理念を、「多と一」、「統一」をめぐる問いとして捉え直したうえで、根本的経験論 (radical empiricism) の構想を「ラディカル・デモクラシー」に通ずるものとして位置づけ、——シュミットの「政治的なるもの」概念などとも対比しつつ——再評価する。さらに、戦争の現実と核の危機が改めて重くのしかかる現在の状況も視野に収めつつ、テクノロジーによる多元的生活世界の変容 (cf. シュッツ「帰郷者」)、とりわけ、核テクノロジーによる「民主的統治の変容と危機」に光を当てることで、「開かれた多元性」のビジョンの意義・射程を再考する。

#### ・核兵器と統治不可能性 “ミニットマン” ——民兵団から核弾頭ミサイルへ

イレイン・スキヤリー『核兵器君主制——民主主義か滅亡か』（岩波書店、近刊予定）

「サムナー は、・・・ジョン・アダムズを「公民の」父として引き合いに出しつつ、「公民」制度としての民兵は、その分配された力のゆえに、「公民」権の守護神であると述べている。・・・サムナーは、国によって決められた均一性が重要だと強調しながら、同時に国の分権を信じた。そして分権は「国家主権の偉大な身体的特性としての」民兵によって確保できると考え、「民兵がなければ、合衆国の支柱は細すぎて国の構造を支えることができないだろう」と主張した。

核時代となり、このかつては美しかった防衛のための構造は、国の何百万人もの市民によってではなく、ひとりの大統領が手にした支軸によって高く掲げられた天蓋、すなわち「核の傘」として描き出されるようになった。・・・このようにテクノロジーの誘惑によって、米国はその革命と憲法によって築かれた基盤から決定的に切断され、それ以降政府は、これらの起源との連続性を、ことさらに注意深く、偽って主張するようになった。代表的な例としてミニットマン・ミサイルがある。しばしば空軍の公式出版物では、三角帽子をかぶってマスカット銃を持った男がミサイルの上に重ねられている。ヒーフナーによれば、「ミニットマンの誘導システムの主要請負業者、ノース・アメリカン・インターナショナル社は、ミサイルを見せることさえしなかった。・・・その代わりに、ライフルを手に持ち、地平線を見張るアメリカ革命時の有名なミニットマンの像を使った」。1.2メガトンの弾頭にもかかわらず、このミサイルはときどき「ライフル」と呼ばれた。この民兵のイメージが選ばれたのは、ヒーフナーによれば、「反軍国主義的で、攻撃的であることには反対の、専制政治に対して怒った時にのみ応ずる人々という理想」を新兵器は具現化しているという、非常に誤った印象を作り出すためだった。そもそも「文民統制」という言葉、大統領が単独で核兵器を統制することに用いるのは非常に不適切であるのは、「文民」という言葉が執拗に、意味の中心から離れた意味で用いられていることに明らかである。「文民」の核心・強調点は、武器を所持する権利と投票権が結びつけられていることに表れている。それが、権限の分配に関する憲法修正がもたらした決定的かつ重要な特性である」。(Scarry, 130-131)

「しばしば米国の人々は、このような核戦力を保有するようになったのはロシアとの冷戦中であり、その重要性は一九八九年のベルリンの壁の崩壊とともになくなったと考える。しかし、オハイオ級の十四隻のうち八隻は、ベルリンの壁の崩壊後に建造・命名され、就役した。[それらの潜水艦の名称・・・ウェストヴァージニア、ケンタッキー、メリーランド、ネブラスカ、ロード・アイランド、メイン、ワイオミング、ルイジアナ] (Scarry, 7-8)

#### \* 早すぎたジェイムズ？

——講演/エッセイ「戦争の道徳的等価物 (The Moral Equivalent of War) (1906: 1910) : 戦争の代わりに (の不在において) 政治的統一と市民的徳をいかに維持・促進するか?

## 関連文献

- 伊藤邦武『ジェイムズの多元的宇宙論』（岩波書店、2009）
- 上原隆『「普通の人」の哲学—鶴見俊輔・態度の思想からの冒険』（毎日新聞社、1990）
- 嘉指信雄。「被曝身体とパワー／権力——ポスト・ヒロシマ時代の「見えるものと見えないもの」」  
（『現代思想 Vol.38-7, 2010年4月』）
- 「「経験と論理」をめぐる呼応と交差—西田幾多郎／京都学派と古典的プラグマティズム」,  
『哲学雑誌 808号』（哲学会編、2019）
- グッドマン, ラッセル.『ウィトゲンシュタインとウィリアム・ジェイムズ』  
嘉指信雄・岡本由紀子・大厩諒・乗立 雄輝訳（岩波書店、2017）
- ジェイムズ, ウィリアム.『ウィリアム・ジェイムズ著作集 全七巻』日本教文社,  
——『プラグマティズム』榊田啓三郎訳（岩波文庫、1957）
- 『根本的経験論』榊田啓三郎・加藤茂訳（白水社、1978）
- 『純粹経験の哲学』伊藤邦武訳（岩波文庫、2004）
- シュミット, カール「政治的なものの概念」（権左武志訳『政治的なものの概念』岩波文庫、2022）
- 『パルチザンの理論——政治的なものの概念についての中間所見』  
新田邦夫訳（ちくま学芸文庫、1995）
- スキャリー, イレイン.『核兵器君主制—民主主義か絶滅か』  
嘉指監訳/小泉直子・古賀高雄訳（岩波書店、近刊）
- トゥロシュー, ティボー.「多元主義的〈闘争の技法〉としてのプラグマティズム—  
ウィリアム・ジェイムズからジャン・ヴァール／ドゥルーズへ」  
嘉指・小嶋恭道共訳,『思想(1134)』（岩波書店、2018年9月）
- 夏目漱石『文学論 上・下』（岩波文庫、2007）
- 『漱石文芸論集』磯田光一編（岩波文庫、1986）
- ムフ, シャンタル.『政治的なものについて』[2005] 酒井隆史監訳・篠原雅武訳（明石書店、2008）
- 山本貴光『文学問題（F+f）+』（幻戯書房、2017）
- James, William. *Memories & Studies*. Longmans and Green, 1924.
- Kazashi, Nobuo. “Bodily Logos: James, Nishida, and Merleau-Ponty,” *Merleau-Ponty: Interiority and Exteriority, Psychic Life and the World*, ed. by D. Olkowski and J. Morely,  
State University of New York Press, 121-134, 1999.
- “Between the Sea and the World of Historical Reality: Reconsideration for a Philosophy of Multiple-Historicity.” In *Tetsugaku Companion to Nishida Kitaro*,  
ed. by H. Matsumaru, Y. Arisaka, and L.C. Schultz. Springer, 2022: forthcoming.
- Livingston, Alexander. *Damn Great Empires!: William James and Politics of Pragmatism*,  
Oxford University Press, 2016.
- Perry, Ralph Barton. *The Thought and Character of William James*, two volumes,  
Little, Brown, 1935.
- Scarry, Elaine. *Thermonuclear Monarchy: Choosing between Democracy and Doom*. Norton, 2007.